



丹波篠山市史編さんにかかる近世・近代史料調査の状況（〈特集Ⅰ〉自治体史編さんの現在2：丹波篠山市史の取り組みと課題）

松本，充弘
出水，清之助

(Citation)

Link：地域・大学・文化：神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報, 17:16-26

(Issue Date)

2025-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100505153>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100505153>



丹波篠山市史編さんにかかる近世・近代史料調査の状況

松本 充弘

出水 清之助

はじめに

令和元年度（二〇一九）より開始された丹波篠山市史の編さん事業は、今年度で七年目に入る。^①この間、コロナ禍を挟みながら各専門部会の調査や協議が進められ、令和八年度には初回配本である自然環境編の刊行が視野に入る段階となった。ただし、本事業では紀要の刊行が見送られたことから、市の普及事業以外の場合で市史編さん事業によって得られた研究成果を発信することが、長らく実現できていなかったことも確かである。^②

この度の特集では、市史の近世編専門部会・近現代編専門部会に所属する松本と出水が、それぞれの専攻する領域における問題関心に基づいて論稿を執筆した。それらの前提として、こ

こでは丹波篠山市における近世・近代の地域歴史資料調査を踏まえ、主要な資料群がどのように伝来し、いかなる歴史的意義を持つているのか、また今後どのような形で利活用が図られるべきかということなどについて、協働して考えてみたい。

一 近世史料調査の状況

（一）調査の経緯と概況

神戸大学大学院人文科学研究科地域連携センターが丹波篠山市において地域歴史資料調査を手がけるようになったきっかけは、平成二三年（二〇一一）三月における中西家文書の発見である。本資料群は近世から近代にかけて、八上新村組大庄屋や日置村村長を務めた旧家に伝来したもので、調査を契機に篠山市教育

委員会（当時）と地域連携センターの間で「中西家文書の調査・研究に関する覚書」が締結された。また、将来的に本史料群の整理を市民参加の形で進めていくことを目的の一つとして、市立中央図書館を拠点とする「地域資料整理サポーター」が平成二五年（二〇一三）六月八日に発足し、以来今日まで活動が継続されてきた^③。サポーター活動では市立中央図書館所蔵の「楽翁文書」や「丹南町史編さん史料」の目録作成・翻刻文入力などを進め、令和四年度（二〇二二）以降は市史編さん事業により収集された史料群の整理にも協力いただいている。なお、令和六年度（二〇二四）より市史編さん事業の事務局（丹波篠山市史編さん課）が市立中央図書館から西紀支所へ移転したことに伴い、サポーター活動も西紀支所内を実施会場としている。

令和元年度（二〇一九）に市史編さん事業が開始した後、地域資料調査については丹波篠山市と神戸大学との共同研究という形で前進を図った。近世編専門部会が発足した令和四年度（二〇二二）以降も共同研究の枠組みを維持しながら、部会活動との密接な連携を意識した調査を展開している。

発足直後の近世編専門部会では、丹波篠山市域が非常に広大で、近世村が約二〇〇にのぼる点を踏まえ、大庄屋文書に着目して地域史像を描くことに取り組む方針が立てられた。多紀郡域では形原松平家の支配下にあった慶安二年（一六四九）から、青山家の入封後一定期間が経過する文化一五年（一八一八）ま

で大庄屋制がとられていた^④。明和六年（一七六九）時点の状況を例にとると、およそ五万石にのぼる丹波国多紀郡の藩領が上組・中組・南組の三組に大別され、さらにそのもとで二〇〇石前後の大庄屋組が設けられていた^⑤。近世編専門部会として注目した大庄屋由来の史料群としては、泉組大庄屋の山田家文書（市立歴史美術館所蔵）、畑組大庄屋の石田家文書（市史編さん課所蔵）、大山組大庄屋の園田家文書（市立歴史美術館、市史編さん課、神戸大学大学院人文科学研究科、および関西大学博物館所蔵）、大沢組大庄屋の杉本家文書（丹南町史編さん史料）、向井組大庄屋の高橋家文書（個人蔵）の五つが挙げられる。これらを分析対象として、各専門部会が検討を進めている。

これらの大庄屋文書に加えて、近世編専門部会で注目しているのは、旧篠山藩主青山家文書に代表される篠山藩政史料である。今回の特集においては、近世史に関わる論稿で青山家文書を含む青山歴史村の収蔵史料を数多く取り上げてもいるため、以下ではその調査の状況についてまとめておきたい。

（二）旧篠山藩主青山家文書の調査

丹波篠山市立青山歴史村には、旧篠山藩主の青山家文書をはじめとする近世・近代史料が収蔵されている。譜代大名の青山家は寛延元年（一七四八）に丹波国亀山藩から同国篠山藩へ移封となり、廃藩を迎えるまでの間、六名の藩主（忠朝・忠高・

忠講・忠裕・忠良・忠敏）が輩出した。廃藩後の青山家当主は東京に居住した一方、明治二年（一八八八）に別邸「桂園舎」が篠山の地に設けられる。以上のような経緯を前提として、青山家伝来の歴史資料は大正年間（一九一二～二六）に篠山へ持ち帰られ、桂園舎の土蔵に保管されていたようである。その後、昭和十九年（一九四四）に文部省の認可を受けて財団法人青山会が設立され、旧大名家ゆかりの地である篠山に根ざした育英事業が展開されてきた。⁶

昭和五十九年（一九八四）、青山会は法人設立四〇周年を記念して、桂園舎の旧衣装蔵を「振徳版本館」と改めた。青山家は藩校振徳堂における藩士教育を目的として、『大学衍義補』（寛政四年〔一七九二〕刊）・『玄宗御註孝経補義』（天明八年〔一七八八〕刊）・『通鑑攬要』（天保五年〔一八三四〕刊）・『刪訂古今文致』（慶応三年〔一八六七〕刊）などの書物を出版しており、それらに由来する版木が伝来している。

次いで昭和六二年（一九八七）に青山歴史村が開館し、以来今日に至るまで青山家文書の一般公開に努めている。青山会が解散した平成一〇年（一九九八）以降、同会所有の土地や文化財などの固定資産は、教育目的にのみ使用するという条件のもとで篠山町（当時）へ寄贈された。

青山家伝来の歴史資料は、朱印状・領知目録や藩政史料を含む歴史資料と、和漢の典籍類に大別される。前者については主

に青山歴史村の古文書一号館に収蔵され、篠山町文化財審議会会長などを歴任した中野卓郎氏により、三二〇〇点余りの史料が目録化されている。⁷ また、青山家当主に大坂城代など幕閣の要職を担う者が多かったことから、広く大坂周辺地域を描いた絵図が三〇点近く確認されている。⁸ 一方、後者については日本文学研究者の上野洋三氏・中西健治氏により、青山歴史村の古文書二号館に収蔵される典籍類六六四点、および兵庫県立篠山鳳鳴高校に所蔵されている青山記念文庫の典籍類四六〇点余りが目録化された。⁹

しかしながら、青山家文書の全容はいまだ明らかになっていないことに加え、近世の藩政日記を中心として、東京時代の保存状況の不備などに起因する虫損・固着の甚だしいものも少なくない。令和四年度（二〇二二）に発足した丹波篠山市史近世編専門部会では、令和五・六・七の三年度をかけて部会が主体となった「古文書合宿」を実施し、青山家文書に含まれる約六〇〇点の藩政日記（篠山移封前の岩槻・小諸・浜松・亀山時代を含む）の状態確認を進めてきた。部会では今後、市史本編に先立つ青山藩政日記の報告書を編集する予定としている。なお、この過程で同志社大学岡光夫研究室に旧蔵されていた藩政日記五八点が神戸大学を経由し、青山歴史村へ返却されている。¹⁰

(三) 青山歴史村の未整理史料群

市史編さん事業の史料調査が進行するなかで、青山歴史村には来歴が明確でない青山家文書以外の史料群も存在することが分かってきた。このような来歴不明の未整理史料は、古文書一号館・二号館に分散しており、令和五年度(二〇二三)以降、神戸大学大学院人文学研究科の専門科目「地域歴史遺産保全活用演習」(通称古文書合宿)の教材として、継続的に整理を進めてきた。それら史料群の概略について、以下に述べておきたい。

①平野家(吹屋)文書

未整理史料の一つは、篠山城下の下二階町に居を構えた平野家(吹屋)文書である。本史料群は中性紙箱四箱分で、令和七年度時点で約一五〇〇点の目録カードが作成された。現在は、近代書簡を中心とする中性紙箱一箱の整理を残す形となっている。なお、史料が元々収められていた段ボール箱には、青山会時代の昭和五五年(一九八〇)の受け入れを示唆する手書きのメモが入っていた。メモには平野家の歴代当主名と確認された年代、およびその年代が昭和五五年からみて何年前かが記されている。それによると、平野家は明和四年(一七六七)に篠山藩領の多紀郡西吹村から分かれた与治左衛門を初見とする。平野家は篠山藩の掛屋に任じられており、近世後期の当主信成(通

称政右衛門)は「懸所取締役」として出精したため、嘉永六年(一八五三)に給人格として藩士に取り立てられた。次代の順信(通称佐十郎)も、引き続き篠山藩士に登用されている。^⑪

②篠山藩士文書(澤井家を中心とする)

もう一つの史料群は、市瀬家・澤井家・鈴木家など篠山藩士に関わる史料群で、中性紙箱三箱分、四〇〇点余りの目録カードが作成された。この史料群については、一通りの目録カード作成が完了している。ただし史料群としてのまとまりは不明瞭で互いに混在しており、八上新村組の大庄屋波部家や、同家の設立にかかる中立舎(心学講舎)に由来する史料、さらには多紀郡大野村の庄屋文書なども散見されることから、来歴についてはなお慎重な考察を期する必要がある。

最も点数が多いとみられるのは、篠山藩士の澤井家にかかる史料である。澤井家は青山家の信濃国小諸藩時代、慶安五年(一六五二)に出仕した重就(通称市兵衛)を初代とする。先主は福島正則で、青山家に仕官した時代の代数は七代を数え、禄高は一〇〇石から一七〇石の間で推移している。^⑫ 郡奉行や京都留守居などを務めた充貴(通称左内)の史料が比較的多く確認される。なお、澤井家は青山歴史村に長屋門の遺構を伝える家でもある。

③史料群伝来の経緯

これらの史料群が青山歴史村に残存している背景としては、青山会理事長や篠山鳳鳴高校校長などを歴任した高橋誠一氏の影響が大きかったのではないかと推定している。なぜなら、今回整理を進めた史料のいくつかに「兵庫県立篠山農業高校社研クラブ」の用箋が挟み込まれ、「高橋誠一氏所蔵」との記載が散見されたためである。高橋氏は昭和二六年（一九五二）に、前年に新築された篠山鳳鳴高校図書館への青山家ゆかりの典籍の寄贈受入に、当事者として関与した方である。一万点余りの典籍を七カ月余りかけて整理し、昭和二七年に青山記念文庫として整備された経緯については、昭和三〇年に編まれた目録に高橋氏自身が寄せた序文からうかがうことができる。¹³ 篠山鳳鳴高校教諭でもあった中西健治氏は、高橋氏の関心は史学関係の事柄にあつたため、その選に洩れた和歌文学や地誌といった典籍類が青山歴史村の古文書二号館に分置されたのではないかと推測している。¹⁴

しかしながらこの間の調査によって、青山家を直接の出所としない町人や藩士の史料が青山歴史村の古文書館に収蔵されていることが明らかになった。このことは、旧青山会を取り巻く人的関係その他の要因によって、篠山藩ゆかりの歴史資料が保全されてきたことを示すものだと考えられる。

（四）小括

以上のように、平成二三年（二〇一一）における中西家文書の発見を契機とした連携事業の積み重ねにより、地域資料整理サポーター活動が定着し、市史編さん事業の現場における推進力ともなった。また、近世編専門部会を中心とする史料調査の取り組みにおいては、旧篠山藩主青山家、ならびに青山歴史村を起点とすることによって、大名家のみならず藩士や百姓・町人にかかる史料群までもが続々と確認されている。本稿で言及できなかった篠山鳳鳴高校の青山記念文庫にも、心学関係の書状約二〇〇点をはじめとした青山家以外の史料が所蔵されており、全体像の把握にはなお時日を要することが予想される。市史の刊行までに残された時間は必ずしも多くはないが、専門部会の活動のなかで可能な限り現状把握と整理を進め、丹波篠山ゆかりの史料群が地域社会において末永く保存されるよう、取り組みを進めていきたいと考えている。

二 近代史料調査の状況

近現代編専門部会では、これまで市内のフィールドワークと地域歴史資料調査を中心に活動を進めてきた。後者に関しては、市史編さん課に用意いただいた収集資料を編さん室で閲覧する

という形式で進め、市内の全体的な資料残存状況を把握しつつ、市史執筆に関係するテーマについて議論を重ねてきた。

ここでは、近現代編専門部会が調査した資料を中心に、今後の市史執筆の核となり得る、市内に伝来した資料群について全体を概観する。その上で特筆すべき歴史的な意義、および市史執筆に向けた課題に関して解説を試みる。

(一) 基本的な資料群

まずは、明治二二年（一八八九）の町村合併（明治の行政町村成立）に至るまでの地域社会に関わる基本的な資料群について概観する。

第一に挙げられるのは、現在市立歴史美術館に保管されている「多紀郡役所旧蔵村絵図」である。明治六年に作成された地籍図約一二〇点が旧郡役所に旧蔵され、現在まで伝わっている。明治初年の村々の具体像を視覚的に把握することができる貴重な資料群である。同じく、明治前期までの各村の詳細を知ることができる資料として市立中央図書館が所蔵する「多紀郡地誌」が存在する。同資料は明治一七〜一八年にかけて、戸長役場が調査・編纂を担当した各町村ごとの「地誌」であり、多紀郡内二二三町村のうち二二二町村で残存している。当時の多紀郡内の町村の地勢・人口・物産・租税などの情報が網羅されており、これまでも『丹南町史』等の自治体史で度々利用されてきた。「地

誌」に掲載された物産に関わる情報は、当該産物がどこに輸出されていたのかも記されており、町村の経済的な分析をする上でも有益なものである。この編纂に関する多紀郡役所と福住村役場の行政文書も合わせて残されているため、当時の調査・編纂の内実をメタ的に把握できるといっても興味深いものである。先に紹介した地籍図も含めて、明治期の地域社会の有様を現在に伝える重要な資料群である。

続いて、行政町村成立以降の地域社会に関わる基本資料を取り上げたい。第一に中核となり得るのは「市役所所蔵行政資料」である。当該の資料は、市役所が所蔵する議会関係文書が主であり、今田村を除く明治期の行政町村、および昭和の合併を経た自治体の会議録が収録されている。そのほか、昭和四〇年代〜平成一〇年頃までの合併協議に関わる資料も含まれている。網羅的かつ通時的に残された会議録などからは、各町村でいかなる問題が議論されていたのかを通観することができ、市史編さんにあたって非常に大きな位置を占める。

第二に重要なのは中央図書館所蔵の「地域新聞」である。篠山の地域新聞の嚆矢は、明治二四年一〇月から東京の青山家邸で刊行された『多紀郷友会雑誌』である。多紀郷友会は旧藩主青山家を中心として結成された郷土関係者の親睦団体であり「同郷人士の智識を交換し兼て団結を計るを以て目的」（規則第一条）としていた¹⁵。同雑誌は在京の旧藩士も含めて、同郷人士

の交際・親睦、情報交換を促すために刊行されている。『多紀郷友会雑誌』は新聞条例によって発行を禁止されるが、同雑誌の系譜に位置づく『多紀通信会雑誌』（明治二九年創刊）、『多紀通報』（明治三六年創刊）などを経て、『篠山通報』（明治四一年創刊）の刊行に至る。¹⁶ この『篠山通報』は初めて雑誌体ではなく新聞体裁になった点で画期的であったとされる。

このように、郷土関係者の情報交換等を目的とする雑誌は、幾度かの中断・変更を経ながら脈々と継続するが、管見の限り、明治期のものは市内にはほとんど残存していない。¹⁷ 一方、大正期以降では、『篠山通報』は中央図書館に大正三〇八年のものが保管されており、同紙を大正九年に改題した『篠山新聞』も大正九〇昭和一四年まで残されている。大正期以降の『篠山通報』・『篠山新聞』は月六〇七回の刊行頻度であり、かつ一年分まるごと残されていない年もあるなど、情報の欠落も懸念されるが、こうした地域新聞と並行して、明治四二年二月から現代まで刊行されている雑誌『郷友』によって、ある程度その間隙を埋めることが可能だと思われる。これら長年にわたって郷土団体関係者によって発行されてきた新聞・雑誌は、近現代の篠山の歴史を伝えるとともに、廃藩以降の多紀郡（旧篠山藩領）内の地域的なまとまりや郷土意識の強さを示唆するものと捉えることも可能だろう。

こうした郷土団体の系譜に位置づく新聞・雑誌以外にも、篠

山には中央の新聞社に連なる地域新聞も刊行されていた。¹⁸ 一つは毎日新聞系列の『篠山毎日』（大正一二年創刊）及び同紙の後継に当たる『篠山毎日新聞』（昭和六年改題）であり、中央図書館には昭和四〇一四年までが残る。もう一つは朝日新聞系列であり、毎日新聞系への対抗として、『兵阪新聞』（大正一〇年に団野鶴吉を社長に創刊）を昭和八年に買収して刊行された『篠柏新聞』がそれにあたる。中央図書館には『篠柏新聞』の昭和八〇一四年分が保管されている。

このように、戦前には三系列の地域新聞が篠山で発行されていたが、戦時期の新聞統制により多紀郡内にあったすべての地域新聞は昭和一四年六月で廃刊となり、水上郡にあった『丹波新聞』（昭和三年創刊）が、篠山の情報を得ることができた唯一の地域新聞となった（こちらも二度目の統制で昭和一六年一月に廃刊）。戦後は『篠山報知新聞』（昭和二二年）・『篠山新聞』（昭和二二年）等が残存しているが、戦時期の統制以降の八年余りは地域新聞の空白期間となる。

以上のように、篠山には地域の歴史を知るための基本的な素材となる新聞資料が豊富に伝来している。通常、戦前の地方新聞は残存状況が芳しくなく、自治体史編さんにあたって桎梏となる場合も少なくないため、篠山の新聞資料の残存状況は比較的恵まれているといえる。市史編さんにあたっては、質・量ともに十分な大正・昭和期に比して、明治期の新聞記事をいかに

収集していくのが大きな課題となるだろう。篠山出身の上野理一等が経営に携わった明治前期の『朝日新聞』（大阪で発行）とのつながりなども視野に入れながら、さらなる資料の収集が求められる。

（二）その他の重要な資料群

その他、トピックごとに重要な資料群を挙げておきたい。

第一に「多紀管内徴兵関係文書」である。同文書は明治と太平洋戦争期の徴兵・兵事に関する資料であり、旧多紀支所に保管されていた福住村・村雲村・大芋村役場の公文書等を含む。特に、福住村に関しては、明治一四と昭和一八年までの村役場の徴兵関係文書、明治三七と昭和一一年までの兵事関係文書が継続的に残されている。また、昭和二〇年九月以降の村雲村役場の終戦事務関係書類など、戦後の戦傷病者及び戦没者遺族への援護関係に関わる多紀町（村）役場・篠山町役場の公文書も含まれている。これら一連の資料は通常戦後に廃棄される場合が多いため、他地域ではあまり見られない特筆すべきものであるといえる。

福住村の徴兵・兵事関係文書の中には、「軍人履歴二関スル重要書類」（明治一四と大正二年）や「日清日露出征軍人來翰集」（大正三と九年）、「戦没者二関スル書類」（昭和二一年）などが含まれており、入営後の兵士の一連の動向を具体的に追跡する

ことが可能である。単なる数値に還元されない、兵士一人一人の足跡を克明に復元することが期待できる点で意義を有するといえる。同様に、大正期以降の「在郷軍人二関スル書類綴」や昭和期の「愛国婦人会関係書類」も残されていることから、銃後の社会を分析できる資料も充実している。その他、各戦没者の村葬に際して「〇〇の面影」（〇〇は戦没者）といった栞も作成されるなど、尚武の精神を尊び、軍人を厚遇しようとする篠山特有の文化のようなものを指摘できる点も重要である。明治四一年に歩兵第七〇連隊の駐屯地が設けられたことや、本庄繁や本郷房太郎をはじめとする著名な軍人を輩出したことも含めて、篠山という地域の有する軍事的な特性をいかに捉えているのかは、市史編さんにあたり大きなテーマとなるだろう。

第二に旧藩士族関係の諸資料である。兵庫県内では姫路藩（二五万石）・明石藩（八万石）に次ぐ規模を有する篠山藩の士族たちは、維新後の篠山においていかなる位置にあったのだろうか。旧篠山藩の士族は維新後には複数の団体を結成してそのつながりを維持し続けている¹⁹。代表的な団体としては、旧藩主を会頭とし旧藩士卒によつて構成された「篠山懐旧会」（以下、懐旧会）がある。明治一二年頃には東京で、一六年には篠山で組織の整備が進められ、一七年末には東西合併のうえで、本部を東京の青山家に置き、篠山・大阪・神戸・京都に分会を持つ懐旧会が成立した。同会は親睦部・救恤部・貯金部・育才部を

持ち土族相互の扶助・親睦を目指して活動している。また、篠山において青山家の事務を取り扱い、郡内に大きな影響を及ぼした団体として「桂園舎」がある。「懐旧会」および「桂園舎」については、関係する資料が青山歴史村に伝来しており、明治と昭和にかけての懐旧会の「往復留」や「稟議録」などが断続的に残されているほか、明治二二、大正二三年の「桂園舎日記」約四〇冊がまとまって残されている。

その他、郷土史家が収集していた資料には、篠山町の少壮士族の会合と思われる「蕩々会」の明治一四と昭和二八年の記録が残されており、土族授産事業や民権運動に旧藩士族がいかに向き合ったのかをうかがうことができる。それ以外にも、旧藩主が私財を投じて明治一七年に設立された鳳鳴義塾（公立篠山中学校を改称）に関する資料が「篠山鳳鳴高校所蔵資料」として保管されている。同資料群には、青山家からもたらされた約一万点の書籍類と、明治以降の鳳鳴義塾に関する資料などが含まれている。

このように、篠山には近現代を通じて、旧藩士族に関わる資料が多く伝来している。かかる資料の残存状況は、旧篠山藩の士族たちが、旧藩主家を中心とするネットワークを構築しながら、地域社会内でも影響力を保持し続けたことを物語る。近現代の地域社会の運営や経済振興において、旧藩士族が大きな役割を果たしたとする近年の研究史上の論点⁽²⁰⁾をさらに深めること

ができる重要な資料群が伝来しているといえるだろう。

以上、豊富な内容を有する資料群の一端について紹介しつつ、近現代編の編さんにおいて注目すべき点について述べた。ここでは触れられなかったが、近現代の多紀郡の大きな転換点となった阪鶴鉄道敷設や歩兵第七〇連隊兵営誘致、現代まで続く丹波杜氏などに関する多様な資料群も残されている。総じて、戦災や自然災害の影響をあまり受けなかったためか、比較的多くの地域資料が伝来しているといえるだろう。市史編さんにあたっては、こうした豊富な資料群に基づく歴史像を市民と共有しつつ、過去の人々の営為によって大切に保存されてきた資料を次世代へ継承していくことが求められる。

おわりに

ここまで丹波篠山市史編さん事業における近世・近現代の両専門部会における調査状況を踏まえる形で、地域歴史資料の伝来や利活用の可能性について概観してきた。今般刊行が予定されている丹波篠山市史は、現地域の全体を包摂する初の自治体史となる予定であるが、当地域では近世に編まれた地誌以来、合併前の旧町村史（誌）編さんが折々に展開されてきた。また、郷土史研究を牽引した奥田楽々斎氏をはじめとする個々の研究者や、「多紀文化顕彰会」などの団体による在野の地域史研究

に関する成果にも、非常に豊かな蓄積がある。⁽²¹⁾ 市史編さん事業を契機として、これまで先人によって営々と続けられてきた丹波篠山の歴史文化をめぐる取り組みが一つでも多く顧みられることを願うと同時に、市域に残る豊富な歴史資料に基づく成果が市民に還元され、さまざまな主体による地域史研究の機運が盛り上がりを見せることが期待される。そのためには各専門部会の活動や、地域連携に基づく共同研究をさらに充実させていきたいと考えている。

註

- (1) 令和五年度(二〇二三)時点での事業内容については、成田雅俊「丹波篠山市史編さん事業の現状と課題」『Link【地域・大学・文化】』vol. 一五、二〇二三年)を参照。
- (2) これまでに実施されてきた主な普及事業として、市広報に挟み込みの「市史編さん便り」、市立中央図書館内でのミニ展示、近世編専門部会を中心とする調査報告会などがある。
- (3) 地域資料整理サポーター活動については、井上勝盛「篠山市立中央図書館地域資料の整理にむけて—地域資料整理サポーター結成と活動」『Link【地域・大学・文化】』vol. 六、二〇一四年)、岩瀬秀子「丹波篠山市立中央図書館での地域資料整理サポーター活動」『ヒストリア』二七六号、二〇一九年)を参照。
- (4) 嵐瑞澄「篠山藩初期の藩政改革について」(『兵庫史学』五八・五九合併号、兵庫史学会、一九七二年)、および『丹南町史』上巻(丹南町、一九九四年)、七二三〜七二五頁。
- (5) 丹南町史編纂史料H二・二〇「御領分多紀郡・桑田郡・武庫郡古高

- 新高組分帳・村分帳」(明和六年(一七六九)、杉本与二家文書)。
- (6) 以下の記述は、畑治男「篠山藩史料の紹介—公開中の青山歴史村所蔵史料—」(『兵庫県の歴史』第二八号、一九九二年三月)、中西健治「青山記念文庫所蔵の文献類について—その活用と保存—」(丹波篠山文化顕彰会会報『あこがれ』第五号、二〇二三年二月)による。
- (7) 『丹波篠山藩(青山家)古文書目録』(一九九一年、未刊)。平成一二年(二〇〇〇)における篠山城大書院の再建に際しても、この目録が整備・再活用されている。
- (8) 鳴海邦匡・上田長生・大澤研一『篠山藩青山家文書』絵図目録…近世前期大坂周辺絵図』(二〇〇九年、未刊)。
- (9) 『青山会文庫所蔵 和漢書分類目録』(財団法人青山会、一九九四年)。これに先行する目録として、『旧書籍目録並二軸物』(桂園舎、一九三〇年)、『書籍并軸物目録』(青山家別邸、一九三三年)、『県立篠山鳳鳴高等学校図書館蔵 青山文庫目録』(兵庫県立篠山鳳鳴高等学校図書館、一九五五年)がある。
- (10) 『令和元年度丹波篠山市・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター連携事業報告書 共同研究「兵庫県丹波篠山市における市史編さん事業のための研究と検討」』(神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、二〇二〇年)。
- (11) 青山家文書二四〇〇「御家人由緒明細録 九ノ下」。
- (12) 青山家文書二三九一「御家人由緒明細録 二」。
- (13) 『県立篠山鳳鳴高等学校図書館蔵 青山文庫目録』(兵庫県立篠山鳳鳴高等学校図書館、一九五五年)。
- (14) 中西健治「青山記念文庫所蔵の文献類について—その活用と保存—」(丹波篠山文化顕彰会会報『あこがれ』第五号、二〇二三年二月)。その後、高橋氏は昭和四二年(一九六七)から同四七年まで篠山鳳

- 鳴高校校長を務められた（『創立一三〇年記念誌』、兵庫県立篠山鳳鳴高等学校創立一三〇年記念事業実行委員会、二〇〇七年）。
- (15) 奥井亜紗子「地域エリートの類型化に関する一試論…篠山市同郷団体における「郷土」意識に着目して」（『社会学雑誌』二二、二〇〇五年）、『多紀郷友会雑誌』第一号（多紀郷友会、一八九一年）。
- (16) 地域新聞については『篠山町七十五年史』（篠山町、一九五五年）一〇〇～一〇三頁を参照。
- (17) 市外では『多紀郷友会雑誌』は国立国会図書館に、『多紀通信会雑誌』は明石工業高等専門学校図書館にて所蔵を確認できる。
- (18) 以下、前掲『篠山町七十五年史』、小谷祐通『思い出の記』（小谷祐通、一九八一年）四四頁、篠山町商工会記念誌編集委員会編『篠山町商工会発足八十年・法制化三十周年記念誌』（篠山町商工会、一九九一年）一七～一八頁を参照。
- (19) 以下、土族の団体については、『多紀郡誌』（私立多紀教育会、一九一一年）二三〇～二三二頁、広田照幸「土族の通婚行動―幕末・明治初期、旧篠山藩の事例―」（近代日本研究会編『明治維新の革新と連続…政治・思想状況と社会経済（年報・近代日本研究 一四）』（山川出版社、一九九二年）。
- (20) 例えば、内山一幸『明治期の旧藩主家と社会…華土族と地方の近代化』（吉川弘文館、二〇一五年）。
- (21) 池田正男「二〇世紀における篠山盆地の考古学史」（『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』第三号、二〇〇三年）、今井進「多紀文化顕彰会の歩みを継承し、新たな活動にむけて」（『Link【地域・大学・文化】』vol. 一四、二〇二二年）を参照。